

2025年2月28日（金）提出

中央大学文学部 学外活動奨学金

## 英国におけるトマス・ベケットのイメージと史料調査

中央大学文学部人文社会学科西洋史学専攻

21E2326018D 桑原萌奈

### 英国におけるトマス・ベケットのイメージ調査

はじめに

本研究では博物館と教会の展示から、現在の英国におけるトマス・ベケットのイメージについて分析した。

カンタベリ大司教トマス・ベケットはイングランドを代表する聖人である。12世紀の崇敬成立以降、ベケットは様々なイメージを付与されてきた。生前のベケットは国王ヘンリ2世の重臣だったが、カンタベリ大司教に叙階された後は、教会法をめぐって王や国内の教会と激しく対立した。ベケットは1170年にカンタベリ大聖堂で国王の部下たちにより暗殺された。しかし、死の直後からカンタベリの住民によってベケットを聖人として崇敬する動きが起こった。ベケットの側近や支持者、カンタベリの修道士は、ベケットを聖人として描いた伝記や死後の奇跡の報告書を執筆し、崇敬の拡大や批判者との論争を行った。暗殺の2年後にはローマ教皇による正式な列聖が決定し、更に翌年には国王が贖罪のための巡礼を行った。以後、カンタベリは国際的な大巡礼地として発展した。だが、16世紀にヘンリ8世による宗教改革が行われた際は、国王に逆らった人物として崇敬が弾圧される。カンタベリ大聖堂はカトリックから英国国教会へと改宗し、ベケットの祭壇は破壊された。一方でイングランド国内に残存するカトリック信徒は、ベケットへの崇敬を強めた。その後、ベケットは歴史研究の対象として注目されることになる。18世紀には合理主義、19世紀にはナショナリズムと科学的手法に基づいた分析が行われた。20世紀以降はベケットの心理、社会史、巡礼、性格の多様性といった幅広いテーマの研究が行われた。

現在では英仏以外での研究も増加している<sup>1</sup>。

ベケット像の変遷は、英国におけるキリスト教信仰や教会史観の変遷を反映している。よって、ベケットのイメージを研究することで、その時代の英国における教会のイメージについても知ることができると考えられる。

では、現代の教会や博物館ではどのようなベケット像が形成されているのか。私は2024年10月25日～11月1日に、カンタベリ大聖堂とウエストミンスター寺院とウエストミンスター大聖堂、V&A博物館と大英博物館を訪問し、各館のベケットに関する展示や観光客の反応を観察した。日本とイギリスでは社会におけるキリスト教の普及度が異なる。さらに、英国国教会とカトリックの関係や過去・現在の公的空間での扱われ方は、現地でなければ実感しにくいはずだ。さらに、日本では西欧中世の遺物そのものにふれる機会が少ない。英国においてどのように史料が紹介されているか確認することで、現代の公的空間におけるベケット像をとらえる一助としたい。

## 1. 教会

### 2-1. カンタベリ大聖堂

#### 2-1-1. 現地外で分かること



左：カンタベリ大聖堂。入口の装飾にはベケットの像もあったが、修復工事中で上手く撮影できなかった。  
右：大聖堂内部

<sup>1</sup> Slocum, Kay. Bernard, The cult of Thomas Becket : History and historiography through eight centuries, Routledge, 2018, pp.1-4.

カンタベリ大聖堂はトマス・ベケットが大司教を務め、国王の配下の騎士により「殉教」した場所だった。597年、紀元イングランドへのキリスト教再布教の際の拠点となったのが起源とされ、その後もイングランドの諸教会の指導者的な立場にあった。さらにベケット崇敬の確立によりローマと並ぶ大聖地となり、中世を通して人気を博した。ヘンリ8世による宗教改革後はカトリックを離脱し、英国国教会の中心として活動している。

聖堂内では、「殉教」現場に祭壇が置かれ、聖域の一つとして扱われている。また、主祭壇でベケットを祀っていたが、宗教改革期に撤去されてからは何も置かれていない。さらに、奇跡や巡礼を描いたステンドグラス、最初に埋葬されていた地下聖堂、カンタベリ史の展示スペースが在る。また、2024年10月時点では、曜日ごとに実施されている有料ツアーのうち、水曜日には *The St Thomas Becket Story* が実施されていた<sup>2</sup>。ベケットが大聖堂で殉教した記念日である12月29日には、特別な典礼である *Memorial Service for the Martyrdom of St Thomas* が実施された<sup>3</sup>。

ホームページでもベケットに関する事柄が複数紹介されている。これらの情報からは、カンタベリ大聖堂はベケットを自らの歴史を代表する存在と見なしており、観光客にもその認識が周知されていることがうかがえる。例えば、カンタベリの概説のページでは、カンタベリ大聖堂の創始と並んでベケットの暗殺と崇敬の確立が紹介されている<sup>4</sup>。さらに、定期的に一定額以上の寄付金を取めた寄付者には特典を付与するとし、公式に *Becket Patrons* と呼んでいる<sup>5</sup>。現在のカンタベリ大聖堂、そして大聖堂が観光客として想定する人々の多くは、ベケットを重要視し、肯定的に扱っていると言える。

カンタベリの歴史を紹介するページからも、ベケットへの注目度や知名度の高さがうかがえる。一連の年表の中で、ベケット暗殺は聖アウグスティヌスによるカンタベリ大聖堂の

---

<sup>2</sup> Canterbury Cathedral, 2024, *Events*, “‘The St Thomas Becket Story’ Tour”, Canterbury Cathedral, <https://staging.canterbury-cathedral.org/whats-on/events/2024-becket-tour/> (2025年2月13日最終閲覧)。2025年3月にも、同様のツアーが実施される予定である。Canterbury Cathedral, 2025, *Events*, <https://www.canterbury-cathedral.org/whats-on/events/> (2025年2月13日最終閲覧)

<sup>3</sup> Canterbury Cathedral, 2024, *Events*, *What's On : September - December 2024*, Canterbury Cathedral, <https://staging.canterbury-cathedral.org/whats-on/events/2024-becket-tour/> (2025年2月13日最終閲覧)。

<sup>4</sup> Canterbury Cathedral, 2025, *Our Story*, Canterbury Cathedral, <https://www.canterbury-cathedral.org/our-story/> (2025年2月13日最終閲覧)。

<sup>5</sup> Canterbury Cathedral, 2025, *Get involved*, “Becket Patrons”, Canterbury Cathedral, <https://www.canterbury-cathedral.org/get-involved/becket-patrons/> (2025年2月13日最終閲覧)

創始と並ぶ大きな事件として扱われている<sup>6</sup>。1170年の暗殺事件に加え、1220年の聖遺物の移葬式、巡礼の流行を背景とした『カンタベリ物語』、ヘンリ8世によるベケット崇敬の弾圧についても言及されている。事件の背景や崇敬の確立、ヘンリ2世による改悛の巡礼についても詳細に説明している特集ページもある。ベケット以外の追加の特集ページのテーマは、カンタベリの創始者で初代大司教である聖アウグスティヌス、ヴァイキングの略奪、ノルマン征服、宗教改革、第2次世界大戦の戦禍である。そのうち詳細に紹介されている人物は、聖アウグスティヌス、同時代のキリスト教徒の女王ベルタ、ヴァイキングにより殉教したアルフェージュ大司教、ノルマン征服期の司教ランフランク、ヘンリ8世である。ベケット以外のカンタベリ大司教は3人、うち聖人は2人、殉教者は1人いる。しかし、彼らを紹介するページはベケットの特集よりも分量が短かった。また、死後の影響に関してもベケット崇敬ほど多くはふれられていなかった。よってベケットは他の人物よりも長期かつ広範にカンタベリの歴史に影響を与えたと見なされていることが分かる。

特集ページにおけるトマス・ベケットの紹介は、次のようなものだ。まず、1170年の暗殺について言及がある。次に、教会法をめぐるベケットとヘンリ2世の対立について説明がある。しかし、詳細な論争の内容については省略されている。さらに、ヘンリ2世と同様に重要な関係者だったイングランドの諸教会やローマ教皇やフランス王についてもふれられていない。ヘンリ2世の不用意な発言によって部下の騎士たちがベケットを暗殺したものの、ヘンリに指示する意図はなかったという解釈がとられている。また、ヘンリ2世はベケット暗殺を後悔し、カンタベリへ大規模な殉教を行ったことが、ベケット伝の一部を引用して述べられている。加えて、生前のベケットの行動について賛否両論があったことも記されている。ただ、同時にカンタベリ大聖堂の修道士たちがベケットの遺体を発見した際、彼に尊敬の意を抱いたという有名なエピソードも紹介されている。ベケットは豪華な大司教の衣装の下に粗末な修道服と苦行衣を身に着けており、普段の言動とは異なる敬虔な面も持っていたという逸話だ。ベケットとヘンリ2世のいずれかを否定することは避けつつ、ベケットの聖性を評価する立場がうかがえる。

また、ベケット崇敬の確立や、聖人伝の作者も紹介されている。ピーターバラのベネディクトとカンタベリのウィリアムだ。彼らはカンタベリ大聖堂附属修道院の修道士で、ベケットの死後の奇跡を記録していた。さらに引用では、ベケット暗殺の現場に遭遇した聖職者エドワード・グリムの名前も挙げられている。一方で、12世紀のベケット伝の作者や編纂者は他にも10名以上存在するにもかかわらず、彼らに関する言及はない。前述した3人はカンタベリ大聖堂におけるベケット崇敬や巡礼の流行の促進者として評価されている。特筆したいのは、前述したベケットの遺体が修道服と苦行衣を身に着けていたというエピソード

---

<sup>6</sup> Canterbury Cathedral, 2025, *A Walk Through Time*, Canterbury Cathedral, <https://learning.canterbury-cathedral.org/a-walk-through-time> (2025年2月13日最終閲覧).

ドの紹介だ。ベケットが密かに苦行衣を身に着けていたという逸話は他の聖人伝にもみられる。しかし、修道服を着ていたという部分は、ピーターバラのベネディクトとカンタベリのウィリアムによるベケット伝が初出となっている<sup>7</sup>。ベケット伝を研究した Staunton は、これをカンタベリ大聖堂による修道士的な聖人としてのベケット像の演出と指摘している<sup>8</sup>。また、1220年のベケットの聖遺物の移葬や、巡礼の流行についても述べられている<sup>9</sup>。このページでは、ベケット崇敬の多様な側面のうち、カンタベリ大聖堂の守護聖人という側面に注目していると言える。

ホームページで公開されている子供向けの教材からも、ベケットはカンタベリと関連づけて周知されていることが読み取れる。子供向けの教材プリントにはベケットの生涯に起きた出来事を並べ替える問題があり<sup>10</sup>、ベケットの伝記が普及していることが分かる。また、バーチャルツアー *The Virtual Pilgrimage Experience* では、中世のカンタベリ巡礼者として選択式のゲームを行うことができる。ここでは、ベケット崇敬の確立期である 1170 年代後半か、チャーサーの『カンタベリ物語』に描かれるような崇敬定着後の 14 世紀後半の 2 つの時代が選べる。1170 年代後半には巡礼者は少数で、深刻な病気を治す奇跡を求めているといった切迫した事情がある者が描かれる。また、国王とベケットが対立していたため、ベケットを崇敬することを危険視する者も登場する。一方、14 世紀後半には巡礼者が増加し、インフラが整えられ、観光ビジネスも成立している。レジャーとして巡礼を楽しむ人物も登場する<sup>11</sup>。つまり、時代によるベケット崇敬の変遷が意識されている。

これらのカンタベリ大聖堂と紐付けられたベケットのイメージは、カンタベリ独自のものと言えるのか。例えば、大聖堂のホームページにリンクがあったサイト *The Becket Story: The Life, Death and Influence of St. Thomas Becket* でも、ベケットとカンタベリ巡礼の関わりについては言及されている<sup>12</sup>。しかしそれ以上に、ベケットの生地であるロンドンとの

---

<sup>7</sup> 'Materials for the History of Thomas Becket', ed. Robertson, James, Craigie, and Sheppard, Joseph, Brigstocke, 7vols, *Rolls Series* 67, 1875-85. vol.2, p.17 (Staunton, Michael, *Thomas Becket and his Biographers*, Boydell press, 2006. p.48)

<sup>8</sup> Staunton, *ibid.*, pp.49-55

<sup>9</sup> Canterbury Cathedral, 2025, *A Walk Through Time*, "Archbishop Thomas Becket", Canterbury Cathedral, <https://learning.canterbury-cathedral.org/a-walk-through-time/becket> (2025 年 2 月 13 日最終閲覧).

<sup>10</sup> Canterbury Cathedral, 2025, *A Walk Through Time*, "A Walk Through Time activity sheets", Canterbury Cathedral, <https://learning.canterbury-cathedral.org/AWalkThroughTime.pdf> (2025 年 2 月 13 日最終閲覧).

<sup>11</sup> Canterbury Cathedral, 2025, *Could you be a medieval Pilgrim?* Canterbury Cathedral, <https://pilgrimage.canterbury-cathedral.org/> (2025 年 2 月 13 日最終閲覧).

<sup>12</sup> The Becket Story: The Life, Death and Influence of St. Thomas Becket, 2025, *Becket & Canterbury*, Centre for the Study of Christianity and Culture at the University of York, <https://thebecketstory.org.uk/canterbury> (2025 年 2 月 14 日最終閲覧).

関わりが強調されている<sup>13</sup>。後述する大英博物館の企画展や常設展でも、カンタベリの守護聖人であることはあくまで一側面として扱われている。よって、カンタベリ大聖堂は意図的に巡礼の守護者としてのベケット像を打ち出していると考えられる。

加えて、カンタベリ大聖堂の公式 YouTube について述べたい。このチャンネルではカンタベリ大聖堂における毎日の礼拝や讃美歌の合唱をライブ配信している。アーカイブを見る限り、配信から一ヶ月後にライブ配信された動画は削除される。しかし、2021年に配信されたベケット殉教850年を記念する動画はいまだに残されている<sup>14</sup>。さらに2024年のベケットの記念日の際も、ベケットに捧げられた特別な礼拝や合唱が行われている<sup>15</sup>。確認した限りでは、カンタベリの他の聖人に対してこのような動画が作成されている様子はなかった。

さらに、カンタベリ大司教だった聖人を紹介する動画も作成されていた。対象となったのは、トマス・ベケット、大聖堂の創始者である聖アウグスティヌス、教会法学者だった聖アンセルム、カンタベリ大聖堂での教育活動を促進した聖テオドール、修道院改革を行い宮廷にも影響力を持った聖ダンスタン、ヴァイキングの襲撃により殉教した聖アルフェージュの6人である<sup>16</sup>。聖テオドールと聖ダンスタンの2人はホームページで紹介されていないこと、動画の内容に説教が含まれることから、より宗教的な意義があると判断した人物を選んでいると考えることができる。動画の公開順はベケットが最も早かった。さらに、ベケットの動画が21分であることに対し、他の人物は7分～9分、最長でも聖アウグスティヌスの15分だった<sup>17</sup>。よって典礼に関わる聖人の中でも、ベケットは最も重視されていると見られる。

---

<sup>13</sup> The Becket Story: The Life, Death and Influence of St. Thomas Becket, 2025, *Becket & London*, Centre for the Study of Christianity and Culture at the University of York, <https://thebecketstory.org.uk/london> (2025年2月14日最終閲覧)。

<sup>14</sup> Canterbury Cathedral, 2020, *Latest Worship*, "A reflection from the Archbishop of Canterbury on the 850th Anniversary of Thomas Becket's Martyrdom", YouTube, [https://youtu.be/qwma5sHLEn8?si=ZN7ouCl\\_ObxUN-75](https://youtu.be/qwma5sHLEn8?si=ZN7ouCl_ObxUN-75) (2025年2月14日最終閲覧)

<sup>15</sup> Canterbury Cathedral, 2024, *Latest Worship*, "Memorial Service for the Martyrdom of St Thomas - Sunday 29 December 2024" YouTube, [https://www.youtube.com/live/MWt682aVR48?si=s6U\\_F1ui-e5wAab](https://www.youtube.com/live/MWt682aVR48?si=s6U_F1ui-e5wAab), (2025年2月14日最終閲覧)。Canterbury Cathedral, 2024, *Evensong*, "Sung Eucharist - The Martyrdom of St Thomas of Canterbury Cathedral — Sunday 29 December 2024" YouTube, [https://www.youtube.com/live/HeaZVsyJr1o?si=9F6V4a\\_ikdrJXdog](https://www.youtube.com/live/HeaZVsyJr1o?si=9F6V4a_ikdrJXdog) (2025年2月14日最終閲覧)

<sup>16</sup> Canterbury Cathedral, 2024, *The Saints of Canterbury*, YouTube, [https://youtube.com/playlist?list=PLPWrcHf2bX\\_bVFyvUPfodQQrGcOk41Bp&si=eO-fANHPOcz8rlZ4](https://youtube.com/playlist?list=PLPWrcHf2bX_bVFyvUPfodQQrGcOk41Bp&si=eO-fANHPOcz8rlZ4) (2025年2月14日最終閲覧)

<sup>17</sup> Canterbury Cathedral, 2025, *The Saints of Canterbury*, "The Saint of Canterbury: Thomas Becket"

## 2-1-2. 現地調査

現地の見学では、ホームページ以上に『ベケットの聖地』としての側面が強く押し出されていた。ベケットが暗殺された場所や主祭壇、奇跡を描いたステンドグラス等には、看板等を利用した説明が添えられていた。

特にベケットの主祭壇は、ヘンリ 8 世に撤去されたまま、床に蝋燭が一本だけ捧げられた状態になっている。宗教改革により崇敬が弾圧された時期はあるが、カンタベリにおけるベケットの存在感は衰えなかったことが示されている。



左：トリニティ・チャペル。現在も礼拝が行われている。

中央：チャペルの最奥部。ベケットの祭壇があった場所に蝋燭が捧げられている。

右：弾圧に関する説明書き。

ベケットの奇跡を描いたステンドグラスは地域との協力によって修復されたという解説もあり、遺産として保護していることがアピールされている。この、最も目立つステンドグラスは、巡礼が奇跡によって救われる物語を複数紹介するものだった。聖人としてのベケット像の中でも、大巡礼地カンタベリの守護者という側面が注目されている。



左：ベケットが巡礼にもたらした奇跡を描くステンドグラス。

中央：地域と協力してステンドグラスを修復したという説明書き。

右：ステンドグラスの他、殉教を描いた絵画も見られた。

また、ベケットが暗殺された場所には祭壇が設けられ、近代の十字架を模したモニュメントが飾られていた。こちらも看板等で場所の誘導が行われ、礼拝がしやすくなってい

YouTube, [https://youtube.com/playlist?list=PLPWrcHf2bX\\_bVFyvUPfofdQQrGcOk41Bp&si=eO-fANHPOcz8rlZ4](https://youtube.com/playlist?list=PLPWrcHf2bX_bVFyvUPfofdQQrGcOk41Bp&si=eO-fANHPOcz8rlZ4)  
(2025年2月14日最終閲覧)



る。壁に描かれた文字は、暗殺者たちが押し入ってきた状況を想像させている。



左：ベケットが暗殺された場所に設けられた祭壇。周囲は墓所となっている。

右：祭壇に反対する壁と扉。暗殺者らが侵入したことを示す文字が書かれている。

ベケット崇敬のモチーフは土産物にも見られた。このお菓子の箱にはカンタベリの名所・名物に交じって、主祭壇のあった場所に置かれた蝋燭、巡礼たちのステンドグラス、「殉教」した場所のモニュメント等が描かれている。



左：売店で購入したお菓子の箱。

右：大聖堂の敷地内にあった写真撮影用のパネル。

ベケットに詣でる人々のステンドグラスがモチーフとなっている。

さらに、地下室で実施されていたカンタベリ史の企画展でもベケットは注目されていた。古代から近代のカンタベリにまつわる人物を紹介する企画だったが、ベケットにも1つのスペースが割り当てられていた。王との対立と殺害の経緯の説明、巡礼者のバッジ等の展示が行われていた。さらに、ヘンリ8世による宗教改革の説明でも、塗りつぶされたベケットにまつわる書籍が展示されていた。ただ、弾圧を明白に「悪」とする記述は見られなかった。

さらに、週1回の有料ツアー *The St Thomas Becket Story* に参加した。内容はベケットの生涯と崇敬の成立の紹介だった。生涯に関しては、ノルマン人の移民商人の子としてのロンドンでの誕生、カンタベリ大司教の書記としての活動、大法官への任命、国王との友情、カンタベリ大司教への就任、国王との対立、フランスへの亡命、帰国と「殉教」という流れが語られた。国王との対立が中心に扱われている一方で、国内の教会との対立・教会法の問題・教皇との繋がり等、事件に対する他の視点や背景説明は省かれている。また、国王やベケットのどちらか一方を正当化するような発言はなかった。崇敬の成立については、民衆による巡礼の開始、「殉教」50年後の移葬、その後の宗教改革期におけるへ



ンリ 8 世の弾圧について触れていた。ベケットの支持者やカンタベリ大聖堂が聖人伝執筆によって崇敬を促進したことについては強調していなかったが、伝記作者の 1 人であるエドワード・グリムについては、「殉教」に立ち会った聖職者として名前が出された。

また、ガイドに「カトリックの聖人であるベケットは国教会ではどのように扱われているのか」と質問したところ、「現在でも（国教会に属する）カンタベリ大聖堂は、（カトリックの）巡礼者の受け入れを行っている。ベケットには非常に敬意を払っている」という説明があった。ただし、「カンタベリ大聖堂の守護聖人である」「カンタベリ大聖堂はベケットを聖人として信仰している」といった言い回しは避けていた。

カンタベリにおける国王と大司教の関係について補足したい。大聖堂内のチャプターハウスには、歴代の国王と大司教を描いたステンドグラスと、彼らにまつわる事件を描いたステンドグラスがあった。ヘンリ 2 世とトマス・ベケット、そしてベケット暗殺の場面も描かれている。これだけ見ると、国王と教会の対立を描いているようにも見える。しかし、友好的な関係だった王と大司教や宗教改革を実施したヘンリ 2 世、近代のエリザベス 2 世も描かれているため、一概に国王を批判しているとも言えない。また、宗派の違いについてもさほど強調していない。ここでも、中立を目指す姿勢が見て取れる。



左：チャプターハウスのステンドグラス。著名なイングランド王とカンタベリ大司教が描かれている。

右：同。当時の事件が描かれており、ベケット暗殺の場面も確認できる。

このようにカンタベリ大聖堂は、今回訪問した施設の中では最も積極的にベケットのイメージを発信していた。国王に対する抵抗者、巡礼の守護者、国教会により弾圧されたカトリックの伝統的聖人といった様々な側面が注目され、時代ごとのベケット像の変遷も意識されている。カンタベリの聖アンセルムの礼拝堂等、他の聖人も重視されてはいるが、ベケットほどではない。一方で、英国国教会の立場から、カトリック期の聖人であるベケットからは多少距離をおく姿勢も見られる。生前のヘンリ 2 世との対立や、ヘンリ 8 世による崇敬の弾圧の紹介は、あくまでも歴史の一事例として、中立的な評価を試みているようだった。

## 2-2. ウェストミンスター寺院

### 2-2-1. 現地外で分かること



左：ウェストミンスター寺院北門。出入口の上部には後述する「20世紀の殉教者たち」の像10体が並んでいる。

右：寺院内部の祭壇の一つ。左側の像はアイザック・ニュートンの記念碑となっている。他にも英国の偉人の記念碑が目立った。

ウェストミンスター寺院は英国国教会の総本山である。西暦960年にベネディクト会修道士によって建立され、1066年以降は伝統的にイングランド王の戴冠を担っている。エドワード証聖王をはじめとする国王や偉人の墓所としても知られている。大聖堂や教区教会ではなく *Royal Peculiar* という特殊な地位にあり、聖職者ではなく君主のみに従属する立場をとっている<sup>18</sup>。観光名所としても、英国国教会の信仰の中心地としても、極めて大きな影響力を持っていると言えるだろう。

公式ホームページにおいて、ベケットに関する言及はほとんどなかった。記事検索機能を使用したところ、過去の説教やヘンリ2世に関する紹介記事等、全11件のみがヒットした<sup>19</sup>。特に、2016年にハンガリーの大統領がベケットの聖遺物とともに聖堂を訪問したニュースに注目したい<sup>20</sup>。カンタベリでのガイドツアーで言及された出来事だが、ウェストミンスター大聖堂ではウェブ上の短い記事以外の形で取り上げられることはなかった。カンタベリ大聖堂と比較すると、明らかにベケットへの注目度は低い。寺院側も観光客側も、ウェストミンスター寺院とベケット崇敬を関連付ける意識は薄いのではないか。

<sup>18</sup> Westminster Abbey, 2025, *History*, "History of Westminster Abbey", Westminster Abbey, <https://www.westminster-abbey.org/history/history-of-westminster-abbey/> (2025年2月15日最終閲覧)

<sup>19</sup> Westminster Abbey, 2025, *Search this website*, "Becket", Westminster Abbey, <https://www.westminster-abbey.org/search> (2025年2月15日最終閲覧)

<sup>20</sup> Westminster Abbey, 2016, *The President of Hungary visits Westminster Abbey*, Westminster Abbey, <https://www.westminster-abbey.org/abbey-news/the-president-of-hungary-visits-westminster-abbey/#i6304> (2025年2月15日最終閲覧)

そもそも、ベケット以外の聖人に関する言及はあるのか。調べられた範囲では、エドワード証聖王に関しては、ホーム画面からアクセスしやすい位置に複数のページを用いた説明があった。王としての生涯だけでなく、聖人としての伝説や巡礼に人気を博した歴史についても述べられている。現在でも毎年10月13日から18日にはエドワードを記念する典礼が行われているようだ<sup>21</sup>。

ただ、他の守護聖人に関する情報はあまり載っていない。YouTubeの公式チャンネルにおいても、エドワードに関してすら、カンタベリにおけるベケットほど盛んに取り上げられているわけではなかった<sup>22</sup>。一方で伝統的聖人という枠組みを外れれば、ホームページでウエストミンスターに埋葬された著名人が大々的に紹介されていた<sup>23</sup>。以上の事から、ウエストミンスター寺院はベケットをはじめとする古代～中世の聖人についてはあまり注目していないと考えることができる。

## 2-2-2. 現地調査

現地の見学では、トマス・ベケットに関する展示や記念碑を見つけることはできなかった。入場と同時に訪問客全員に音声ガイドが配られたが、そちらでも、ベケットに対する言及はなかった。

そもそもウエストミンスター寺院は、伝統的聖人の聖地というより英国王の墓所としての性格を強く打ち出していた。例えば、音声ガイドでは埋葬されている王や著名人の紹介は詳細に行っており、写真や動画も用いて記念碑を見つけやすくしていた。一方で、聖人に関する言及はほとんどなかった。

例外として、中央祭壇に埋葬されているエドワード証聖王は列聖されている。ただし、音声ガイドでの紹介は聖人というよりも歴代のイングランド王の一人という表現がされていた。ホームページ上では崇敬について言及されていたものの、音声ガイドでは「ウエス

---

<sup>21</sup> Westminster Abbey, 2016, *Explore History*, “Celebrating St Edward”, Westminster Abbey, <https://www.westminster-abbey.org/history/explore-our-history/celebrating-st-edward/> (2025年2月15日最終閲覧)

<sup>22</sup> Westminster Abbey, 2025, YouTube, <https://www.youtube.com/@WestminsterAbbeyLondon> (2025年2月15日最終閲覧)

<sup>23</sup> Westminster Abbey, 2025, *History*, “Famous people / organisations”, Westminster Abbey, <https://www.westminster-abbey.org/history/famous-people-organisations/> (2025年2月15日最終閲覧)

トminster寺院の守護聖人である」という紹介や巡礼・典礼に関する説明はされていなかった。

さらに、西廊入口に『20世紀の殉教者たち』と題された10人の石像がある。マーティン・ルーサー・キング牧師ら、公共善のために活動し殺害されたキリスト教徒が、国や宗派の区別なく10人選出されている。また、第一次世界大戦の犠牲者を追悼する『無名戦士の墓』や偉人の墓・記念碑の紹介といった死者の賞賛は盛んに行われている。しかし、これも伝統的聖人として表象しているわけではない。

さらにチャプターハウスのステンドグラスには、カンタベリ大聖堂とは対照的に、歴代のイギリス国王と諸地域の紋章が描かれていた。聖人・聖職者の姿はなかった。



上段左：主祭壇。奥にエドワード証聖王の棺があるが、床の老朽化のため見学人数が限定されている。

上段中央：無名戦士の墓。

上段右：チャプターハウス。



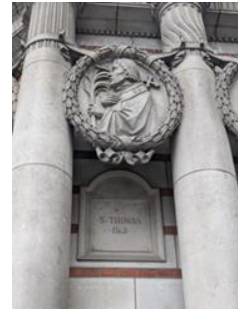
下段：英国の偉人の墓、棺、記念碑等。エリザベス1世ら、王族の墓所も設けられていた。

以上の事例から、ホームページからの推測と同様に、ウエストminster寺院はベケット崇敬以前に伝統的聖人の崇敬自体を盛んに行っていないと見なすことができる。

## 2-3. ウェストminster大聖堂

### 2-3-1. 現地外で分かること





左：ウエストミンスター大聖堂。  
中央：正面入り口。  
右：ベケットのレリーフ。

ウエストミンスター大聖堂はロンドンに位置する、イングランドで最大のカトリックの教会である。英国におけるカトリックの復興後、1903年に司教らの主導で完成した。

大聖堂のホームページではベケットに関する言及は確認できなかった。守護聖人としては、16世紀にカトリックの信仰を守り殉教した聖サウスワースの名前が挙げられている。また、アメリカ大陸で初めてカトリックの宣教を行った司教や歴代のウエストミンスター大司教が埋葬されていることも述べられている<sup>24</sup>。言及がある者は皆、宗教改革期以降のカトリック教徒であることが印象的だ。

一方でウエストミンスター教区のホームページでは、前述したハンガリーにあるベケットの聖遺物の巡幸について複数の記事があった。ウエストミンスター大聖堂の方が寺院よりもこのプロジェクトに力を入れていることが伺える。記事には、巡幸はハンガリー大使館とイングランド国教会に加え、イングランドおよびウェールズのカトリック教会の共同事業であったと書かれている。さらに、ベケット崇敬のハンガリーでの受容や両国の交流の歴史についても詳細に解説されている<sup>25</sup>。イングランドのカトリック教徒にとって、ベケットの存在は歴史上の重要な一部であり、他国の教会との交流にも関わってくる事が分かる。

### 2-3-2. 現地調査

訪問時は工事中で立ち入れなかったが、トマス・ベケットの祭壇が設置されている。使

---

<sup>24</sup> Westminster Cathedral, 2025, *History*, “History of the Cathedral”, <https://westminstercathedral.org.uk/the-cathedral/history-of-the-cathedral/> (2025年2月15日最終閲覧)

<sup>25</sup> Diocese of Westminster, 2016, *Vocations News*, “Reuniting the Relics of St Thomas Becket”, <https://rcdow.org.uk/vocations/news/reuniting-the-relics-of-st-thomas-becket/> (2025年2月15日最終閲覧)

徒や聖母の祭壇よりも小規模だが、大祭壇の近くに位置していた。

加えて、正面入口のレリーフの中でもベケットが登場した。テーマがイングランドを代表する聖職者であるため、10人中1人とされるほど評価されていることが分かる。

なお、この聖堂には各地の軍を除けば墓所や記念碑があまり見当たらなかった。一方で、ウエストミンスター寺院よりも聖人崇敬が盛んにおこなわれていた。例えば、宗教改革期の聖職者の遺体が聖遺物として安置されていた。さらに、聖人に捧げられた聖堂も多かった。聖母や使徒に加え、中世初期のイングランドの聖人や、アイルランドやスコットランドと縁が深い聖人のための祭壇もあり、看板で解説が添えられていた。

まとめると、ウエストミンスター大聖堂は、イングランドのカトリック教会として弾圧された歴史をアイデンティティと見なしていた。一方で、英国国教会が存在しない中世の歴史に関しては、比較的紹介が少なかった。ベケットは中世人でありつつ、後に国教会による崇敬の弾圧を受けているが、あまりそこを指摘する説明等は見られなかった。よって、イングランドを代表する聖人として重視されてはいるが、カンタベリほど注目されているわけではないと結論できる。

また、今回訪問した施設の中では唯一写真撮影が禁止されていたことも付記したい。ウエストミンスター大聖堂は観光地というより信仰の場であろうとしているのではないか。

#### 2-4. 教会のイメージ調査

各教会からは歴史的事件としてベケットを扱う姿勢が読み取れた。カンタベリ大聖堂は王との対立や大聖地化といったベケットの歴史を喧伝しつつ、かつてのカトリックの信仰という形で一定の距離を保っている。一方で、ベケットを暗殺したヘンリ2世や崇敬を弾圧したヘンリ8世に関して明確な批判をしているわけではない。ヘンリ8世が破壊したベケットの祭壇をあえて放置していることは、カンタベリの歴史の変遷を提示し、その中におけるベケットを印象的な『事件』としてある程度尊重する姿勢と見なせる。

信仰よりも歴史的事件の提示という性格が強いという点は、ウエストミンスター寺院にも当てはまる。音声ガイドでは、有名人の墓や記念碑の紹介、さらに墓の建設者の立場によって故人の扱われ方が異なるというエピソードが紹介されていた。『20世紀の殉教者たち』の選定も、信仰対象というより英国による偉人への注目という側面が強い。キリスト教を支柱にしつつ密着はしない、英国（王室）の立場の表明と言える。

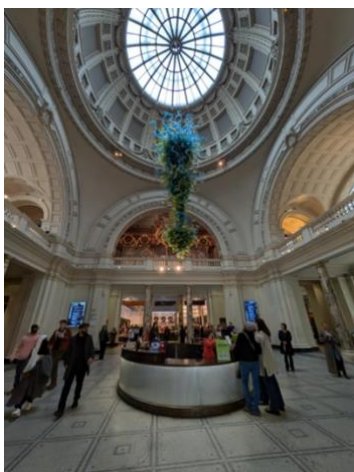


一方でウエストミンスター大聖堂はカトリックの歴史と聖人崇敬をある程度関連づけている。イギリス連邦内の諸地域の聖人の紹介や宗教改革期の故人の遺体の安置も歴史的イベントの展示と言えるが、より聖人崇敬との結びつきが強い。その中で、アウグスティヌスやアンセルムのような他のカンタベリ大司教やイングランドの聖職者とは別にベケットの聖堂が置かれていたことから、カトリック内でも象徴的な存在だと見なすことができる。ただしカトリックが弾圧された宗教改革期以降の歴史は他の2教会よりも強調されており、ベケットはあくまでも諸聖人の一人として扱われている。

## 2. 博物館におけるトマス・ベケット

### 2-1. V&A 博物館

#### 2-1-1. 現地外で分かること



左：V&A 博物館のホール。

右：ルネサンスのギャラリーの1つ。空間を広く用いて、使用されていた状況を再現しながら道具を展示している。

V&A 博物館は主に工業製品のデザインの展示を行っている。1852年に製造業の博物館として開業したことが起源とされる<sup>26</sup>。今回はサウスケンジストン館を訪問した。

ホームページ上ではベケットに関する特集記事を発見することができなかった。

しかしオブジェクトの検索では、ベケットが重視されていることが伺えた。検索フィルターの項目として *Becket, Thomas (Saint)* が設定されており、注目されることが想定さ

<sup>26</sup> V&A Museum, 2025, *About Us*, <https://www.vam.ac.uk/info/about-us> (2025年2月15日最終閲覧)

れている。項目名で検索したところ、29 点の所蔵品がヒットした<sup>27</sup>。有名な所蔵品である 12 世紀の聖遺物容器に加え、典礼用の衣装やその一部、祭壇等に用いられたアラバスターのレリーフパネル等があった。時代ごとに見ると、12 世紀は聖遺物容器が 1 点、13 世紀はなし、14 世紀は教会の用具が 6 点、15 世紀はレリーフパネルを中心に 16 点、16～18 世紀は合わせて 3 点、19 世紀・20 世紀はスケッチを中心にそれぞれ 4 点となっている。なお、ベケット崇敬は 12 世紀後半に始まり、1534 年の英国国教会の成立によって弾圧されている。たしかに 16 世紀以降は所蔵品の数が減っているため、教会が崇敬を支持しなくなったことが分かる。更に、細かく見ると、15 世紀のレリーフパネルの内訳は、ベケットを中心に描いたものが 4 点、洗礼者聖ヨハネの傍に他の聖人と共にベケットが彫られたものが 10 点となっている。ベケット単体だけではなく、他の大聖人と共に崇敬されることも多かったということは、暗殺から時間を経て崇敬が定着したことも表しているのではないか。また、19 世紀～20 世紀の演劇の舞台衣装、典礼衣装、祭壇のスケッチは、ゴシックリヴァイバル期の再注目と解釈できた。

一方で、中世の各世紀におけるベケット崇敬や巡礼の興隆は読み取りにくい。V&A 博物館は、少なくともベケットに関しては、教会が利用していた道具を中心に収集している。後述する大英博物館と比べると、高価な所蔵品の割合は高いが、数は少ない。よって、安価な量産品を通して民衆の生活を伺うことは、難しいのかもしれない。

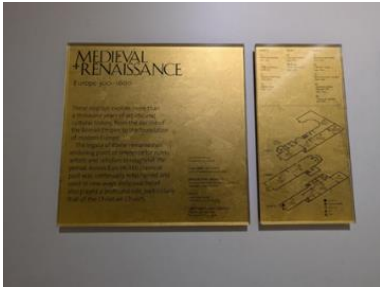
## 2-1-2. 現地調査

V&A 博物館では、全 146 中 6 つのギャラリーで中世・ルネサンスの展示を行っていた。ベケットに関する遺物は、12 世紀、13 世紀、14 世紀の遺物がある 63 号室と 64 号室に集中している。なお、パネルで本館における時代区分の定義を説明したり、およそ 1 世紀につき 1 つの区画をあてがっていたりと、時代の区分や変遷に関しては細かく設定されていた。同じ国立博物館である大英博物館よりも、イングランドおよびヨーロッパの展示が詳細だった。

---

<sup>27</sup> V&A Museum, 2025, *Search*, "Person: Becket, Thomas(Saint)",

[https://collections.vam.ac.uk/search/?id\\_person=N37&page=1&page\\_size=15&q=](https://collections.vam.ac.uk/search/?id_person=N37&page=1&page_size=15&q=) (2025 年 2 月 15 日最終閲覧)



左：中世・ルネサンスのギャラリーの地図。

右：V&A 博物館における「中世」「ルネサンス」の時代区分に関する解説。

ベケットに関する史料については以下の通りだ。まず、12世紀の区画には暗殺直後のベケットにまつわる資料があった。ギャラリーの中央にはベケットの聖遺物容器（1190年から1210年）が単体で展示されていた。売店でポストカードが売られていたことから、館としても注目していることが分かる。

また、同じくりモージュのエナメル細工でできた聖遺物容器の破片や、ベケットが着用していたという伝説のあるミトラ（1160年から1220年）も展示されていた。



上段左：ベケットの聖遺物容器が展示されているギャラリー。中央最奥部のガラスケースに容器が展示されている。

上段右：ベケットの聖遺物容器。



下段左：聖遺物容器の破片。

下段右：右側にベケットが着用していたという伝説があるミトラが展示されている。

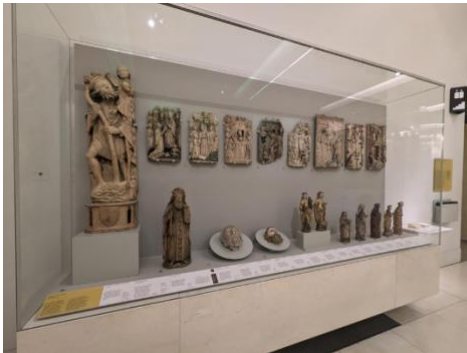
次に 14 世紀の区画では、ベケットを含めた殉教者がモチーフとなった司教のマント (1310 年から 20 年) があった。



左：司教のマント。聖人の殉教の場面が描かれている。

右：マントの図柄のうち、ベケットの殉教の拡大図。

最後に 15 世紀の区画では、ベケットの生涯を描いたアラバスター (1450 年から 1500 年) が展示されていた。同時に、以降の時代は同様の遺物が少なくなることにふれ、ベケット崇敬の衰退を指摘していた。



左：アラバスターの展示。

右：ベケット伝の各場面を彫ったアラバスター

加えて、近代イギリスの物品を展示している 122 号室にもベケットに関する事物があった。19 世紀に「ゴシックリヴァイバル」と称される中世的趣味が流行した際、典礼用の衣装の一部にベケットがデザインされている。



左：ゴシックリヴァイバルの説明。

右：中央のケープのフードにベケットの頭部がデザインされている。他にも家具・典礼用の道具が多数収集されていた。

大英博物館よりもベケットに関する所蔵品は少ないが、展示している物品の数は多い。また、大型で高価な道具の割合も多く見応えがあった。よって、博物館を訪問するのみで



あれば、大英博物館よりもベケット崇敬の紹介が目立った。さらに、ベケットの説明においては、暗殺事件や巡礼の流行に加え、典礼での利用に焦点が当たっていた。加えて、中世における崇敬の創出、確立、定着と衰退、ゴシックリヴァイバル期の再注目という流れも分かりやすかった。これも所蔵品の性質に起因していると考えられる。

## 2-2. 大英博物館

### 2-2-1. 現地外で分かること



左：大英図書館の中央ホール。

右：中世ヨーロッパのギャラリー。

大英博物館は年間 600 万人以上が訪問する世界的な規模の博物館である。1753 年に、貴族による博物館を統合する形で、世界初の無料国立博物館として設立された。その後もイギリスやヨーロッパだけでなく世界各地・各時代の収集・研究を続け、60 以上のギャラリーで展示を行っている<sup>28</sup>。ベケットに関する史料は『中世ヨーロッパ』がテーマの 40 号室に集中していた。ただ、聖遺物容器 1 点のみが 1 号室に展示されていた。『西欧中世』のギャラリーは前述の 1 室のみで、時代区分も 1050 年～1500 年と V&A 博物館より大まかに設定されている。では大英博物館において、トマス・ベケットはどのように扱われているのか。

まず 2021 年に特別展 Thomas Becket : murder and the making of a saint が開催されている。ここではベケットの死後 850 年を記念し、ベケットの生涯と死後の影響、宗教改革期までのイメージの変遷を提示している。主なテーマは、ベケットの生涯と崇敬の発展、ベケット暗殺の背景となった国王との対立、1220 年の聖遺物の移葬による崇敬の高まり、マ

---

<sup>28</sup> The British Museum, 2025, *The British Museum Story*, "History", <https://www.britishmuseum.org/about-us/british-museum-story/history> (2025 年 2 月 16 日最終閲覧)

グナ・カルタとの関係、ヘンリ 8 世によるベケット崇敬の弾圧が取り上げられている<sup>29</sup>。

特筆すべきは、ベケットとマグナ・カルタの関係というテーマだ。カンタベリ大司教スティーブン・ラングトンは、マグナ・カルタを起草し、貴族や教会が国王に抵抗することを目指した。彼は国王に対する抵抗のシンボルとしてベケットを篤く崇敬し、前述した 1220 年の移葬も主導している<sup>30</sup>。このテーマは他の施設による紹介では見かけたことがないため、大英博物館独自の視点と言える。英国におけるベケット崇敬は、教会による国王への抵抗という側面があったことを強調している。

また、特別展に関する動画配信も行われている。キュレーターによる解説を中心とした 12 本の動画がまとめられており、1 時間を超えるものも多い。特別展のテーマに沿った内容に加え、『カンタベリ物語』や T.S.エリオットによる『大聖堂の殺人』といった文学作品も注目されている<sup>31</sup>。ベケットの歴史が重要なテーマと見なされていることが分かる。

次に、大英博物館における所蔵品の状況はどうか。ホームページで検索したところ、やはり *St Thomas Becket, Archbishop of Canterbury* の項目が設けられた上で、全 181 点が収集されていた。時代が特定されていない所蔵品もあるので概数になるが、12 世紀には巡礼による小瓶やバッジを中心に 18 点、13 世紀には 48 点、14 世紀には 95 点、15 世紀には 62 点が現存する。16 世紀からは印刷物を中心に 5 点、17 世紀には 8 点、18 世紀には 25 点、19 世紀には 19 点、20 世紀には 4 点となっている<sup>32</sup>。巡礼用バッジが 79 点を占めていることから見ても、V&A 博物館より、安価な日用品の収集に力を入れていることが分かる。よって崇敬の興隆・弾圧、議論の対象というベケットのイメージ変遷が分かりやすいコレクションとなっている。さらに V&A と比較すると、印刷物が 48 点と V&A より高い割合を占めている。内容もスケッチだけでなく、ポスター、書籍、書簡の封蝋等、多様

---

<sup>29</sup> The British Museum, 2021, *Past Exhibition*, "Thomas Becket : murder and the making of a saint", <https://www.britishmuseum.org/exhibitions/thomas-becket-murder-and-making-saint> (2025 年 2 月 15 日最終閲覧)

<sup>30</sup> Nicholas Vincent FBA, 2021, *Blog*, "Thomas Becket and Magna Carta", The British Museum, <https://www.britishmuseum.org/exhibitions/thomas-becket-murder-and-making-saint> (2025 年 2 月 15 日最終閲覧)

<sup>31</sup> The British Museum, *Events*, "Thomas Becket : murder and the making of a saint", [https://youtube.com/playlist?list=PLHcErFjbjqlwyMUHGKwMarMOzK52GFFcl&si=9G4rX0wUKMw5\\_TCa](https://youtube.com/playlist?list=PLHcErFjbjqlwyMUHGKwMarMOzK52GFFcl&si=9G4rX0wUKMw5_TCa) (2025 年 2 月 15 日最終閲覧)

<sup>32</sup> The British Museum, *Search*, "Person: St Thomas Becket, Archbishop of Canterbury", [https://www.britishmuseum.org/collection/search?agent=St+Thomas+Becket,+Archbishop+of+Canterbury&view=gri&d&sort=object\\_name\\_\\_asc&page=1](https://www.britishmuseum.org/collection/search?agent=St+Thomas+Becket,+Archbishop+of+Canterbury&view=gri&d&sort=object_name__asc&page=1) (2025 年 2 月 15 日最終閲覧)



だ。イタリア半島やベネルクスで発見されたものも多く、より多様かつ広範な収集を行っていると言える。

## 2-2-2. 現地調査

40号室の展示スペースのうち、ベケットにまつわる遺物があったのは以下の区分だ。

まず『司教たち』のスペースでは、殉教の場面のアラバスター（1450-1500年頃）、聖遺物箱の1つ（1210年頃）、ベケットの可能性のある大司教を描いたタイル（1330-50年頃）、ベケット論争を仲介したアンリ・ド・ブノワの銘板（1150年頃）が展示されていた。ベケット崇敬は教会改革後、大司教が教皇との結びつきを強くした結果国王と対立した一例として紹介されていた。この見解は12世紀のイングランドの諸教会と教皇の利害が必ずしも一致していなかったという研究<sup>33</sup>から考えると、いささか粗雑すぎるのではないように思える。



左：『司教たち』の展示スペース  
中央：殉教を描いたアラバスター。  
右：聖遺物容器。

次に展示が多かったのは『聖人と巡礼』だった。解説ではカンタベリがヨーロッパ有数の大聖地として紹介されており、殉教者のバッジや聖遺物入りのペンダント（15世紀）の1つにベケットのイメージが用いられていた。



左：『聖人と巡礼』のケース。  
右：ケース内の中世の大巡礼地の地図。カンタベリも含まれている。

<sup>33</sup> Staunton, Michael. *Thomas Becket and his Biographers*. Boydell press. 2006, p.66

最後に『イコンとイメージ』では、キリスト像やペテロのイコンの中に一点、ベケットのアラバスター（1350-75）が展示されていた（訪問時は研究のため非公開）。

なお、他のスペースは『ビザンツと隣人たち』『商人、都市、交易』『騎士』『王と王妃』『イスラムとヨーロッパ』『十字軍』『狩猟と宴会』『罪と救済』『修道士』、小さなスペースとしては『ルイス島のチェス盤』『聖エウスタキウスの聖遺物』『薔薇戦争』等があった。上記以外のスペースはキリスト教関連のテーマでもベケットにまつわる展示はなかった。

これらの史料から読み取れるベケットのイメージは、巡礼地の聖人・国王との対立者というものだ。V&A 博物館と比較すると、国王との対立を政治的事件として大きく扱っていることが特徴的だ。また、時代・地域の区分が広いため、ベケット崇敬の変遷は追いきにくい。逆に言うと広範囲を扱っているにも関わらずベケットの史料が散見されることから、イングランド内外での存在感の大きさがうかがえる。

一方、1号室は啓蒙主義をテーマにしたギャラリーであり、様々な時代・地域の蒐集品が展示されていた。『考古学の誕生』をテーマにしたスペースに聖遺物容器の1つが収められており、崇敬の背景説明が添えられていた。研究の史料というより珍品・蒐集品として物品を展示している場所であることを考えると、やはり、そこでも選ばれるベケット崇敬の知名度の高さが分かる。



左：1号室の展示の1つ。『考古学の誕生』がテーマだ。

右：ベケットの聖遺物容器。  
下のナイフ等は、異なる時代・地域から蒐集された。

### 1-3. 博物館におけるベケットのイメージ

博物館においては、館ごとに微妙に異なった視点からベケットを捉えていた。大巡礼地の聖人という認識は共通している。しかし、V&A 博物館では長期の崇敬、大英博物館では国王との対立に焦点が当てられていた。

また、館ごとのテーマによって時代区分が異なることも分かった。V&A 博物館には、中世・ルネサンス、16 世紀以降の英国、近世以降のヨーロッパのギャラリーがある。一方で大英博物館はヨーロッパ以外の地域のコレクションも保有しており、少なくとも中世ヨーロッパについては、V&A 博物館より幅広く大まかな時代区分を採用している。これは力を入れているコレクションの時代や地域の幅が異なるからだ。よって結果的に、V&A 博物館の方がベケット崇敬の変遷や、西欧のキリスト教社会における聖人崇敬の位置について意識しやすい構成となっていた。一方で大英博物館の展示からは、幅広い時代・地域の中では、王との対立とカンタベリの大聖地化というベケットの側面が強調されることが確認できた。

### 3. まとめ

訪問した施設では、それぞれ微妙に異なるベケット像が打ち出されていた。背景には施設の立場や、紹介する物品による説明の方向性の決定という事情がある。

教会では各宗派やアイデンティティとする歴史によって、現在のベケット像の方向や歴史の解説が異なっていた。カンタベリ大聖堂は古代から宗教改革期までの歴史を宗派から距離を置きつつ叙述し、巡礼の守護者であり続けたベケットのイメージを創出していた。英国国教会の総本山であるウエストミンスター寺院はベケットをはじめとする伝統的聖人のイメージをあまり用いていなかった。近代に復興したカトリックのウエストミンスター大聖堂は、伝統的聖人の一人としてベケットを扱っていた。キリスト教自体がイギリスほど定着していない日本では、宗派により各教会の立場が異なるという状況があまり実感できなかった。よって今回の訪問では、「教会の立場が反映された聖人崇敬」という、史料には登場するが具体的イメージが乏しかった事例を知ることができた。

また、博物館では各館の専門分野によって、結果的に読み取れるベケット像が異なっていた。工芸品を中心に収集しヨーロッパの展示に力を入れる V&A 博物館では、精緻な工芸品を細かな時代区分ごとに観覧できるため、典礼におけるベケット崇敬や時代ごとの変遷をたどりやすかった。一方、より広範な時代・地域を扱う大英博物館では、「中世ヨーロッパ」の政治における国王との対立・巡礼という側面からベケットの影響力が散見された。

今回は常設展を対象としたため、ベケットにまつわる歴史を叙述するために史料を収集

するのではなく、収集品からベケットの歴史を展示した場合のイメージを分析することとなった。これは、二次史料による研究では想定していなかった事態だった。今後、特定の施設におけるベケット崇敬や物品を基にしたイメージの分析を行う際、このような物理的制約を想定しなければならないことが分かった。これも、中世ヨーロッパの遺物自体が少ない日本では気づけなかったことだ。

現代の英国におけるトマス・ベケットのイメージ分析を通して、イメージはそれを発信する集団の立場や、媒体となる空間・物品に依拠していることが分かった。今後、12世紀のベケットのイメージを分析する上でも、参考にしたい。

## 12世紀ベケット伝の写本閲覧

はじめに

今回の活動では、ベケットのイメージ調査と並行して、12世紀のベケット伝の写本を実際に閲覧した。

まず、西欧中世文化史において写本を史料として用いる意義について述べたい。印刷された書籍と写本では、テキストの「正確性」という概念が異なる。同一のテキストを扱っていても写本ごとに文言が異なることは多かった。しかも、それは必ずしも書記による過ちと見なされたわけではなかった。テキストを書き写す際に書記の解釈によって文言を変化させてしまうことは、本来あるべきと考えられていたテキストの「復興」として肯定されていた<sup>34</sup>。よって中世写本を史料とする場合は、研究によっては、近代に編纂されたいわゆる標準版だけでなく写本ごとの差異を分析することが有効となる場合がある。また、テキストだけでなく写本そのものからも受容された時代の文化を読み取ることができる。写本には、写字室の技術力、財力、注文主の地位、作品の重要性と価値が反映されている

---

<sup>34</sup> ハメル, クリストファー・デ, 『中世の写本ができるまで』加藤磨珠枝監修, 立石光子訳, 白水社, 2021年, pp.44-46

35. ひいては当時のテキストの重要性や用いられ方も知ることができるだろう。

では、12世紀後半における写本は何を素材として使用し、どのように作成されていたのか。5世紀以降は巻物に代わり、コデックス（冊子写本）が主要な記録媒体として用いられた。よって12世紀後半のベケット伝の多くはコデックスの形で伝えられている。

コデックスはどのように製作するのか。まず、獣皮紙を二つ折りにした「ビフォリウム」が必要となる。中世後期に至るまで、文字を記すために使われたのは紙ではなく獣皮紙だった<sup>36</sup>。山羊、羊、仔牛の革が好んで使用された。羊の羊皮紙はクリーム色、山羊は灰褐色をしている。毛が生えていた銀面は色が濃く、内側に捲れる。一方で肉側は白くなめらかで自然に反るとされる。見開きの頁には常に同じ側の獣皮が使用された<sup>37</sup>。獣皮紙には血管の跡や背骨の跡、細かな毛穴等も見られる<sup>38</sup>。獣皮紙のサイズは内容によって変化した。フォリオ（獣皮紙を1回折った大判なサイズ）は豪華版聖書、典礼本、時祷書など、キリスト教関連の公的展示物に用いられた<sup>39</sup>。13世紀から印刷本の普及までは、頁ではなくフォリオごとに番号が振られ、写字生による枚数の確認に用いられた<sup>40</sup>。

なお、本文を書く予定の場所には、全ての獣皮紙にコンパスと定規を用いて等間隔に罫線を記入していた<sup>41</sup>。12世紀は1頁分のスペースを二段組で分割するのが一般的だった<sup>42</sup>。また、同時期の罫線は鉛筆を用いて書かれた<sup>43</sup>。

次に、ビフォリウムを背で縫い綴じ、クワイヤ（折丁）の状態にする<sup>44</sup>。写字生や写本

---

<sup>35</sup> ハイデ、クラウディア・プリンカー・フォン・デア、『写本の文化誌 ヨーロッパ中世の文学とメディア』一條麻美子訳、白水社、2017年、p.27

<sup>36</sup> ウェルズリー、メアリー、『中世の写本の隠れた作り手たち ヘンリー8世から女世捨て人まで』田野崎アンドレア監修、和爾桃子訳、白水社、2023年、p.19

<sup>37</sup> ハメル、前掲書、pp.54-55

<sup>38</sup> ハメル、同上書、pp.40-43

<sup>39</sup> ハイデ、前掲書、p.31

<sup>40</sup> ハイデ、同上書、p.31. ウェルズリー、前掲書、p.20

<sup>41</sup> ハメル、前掲書、pp.54-55, pp.62-63

<sup>42</sup> ハメル、同上書、p.66

<sup>43</sup> ハメル、同上書、p.66

<sup>44</sup> ウェルズリー、前掲書、p.20

画家がクワイヤごとに仕事を分担・交代したために、不規則な長さの折丁が混在する写本もある<sup>45</sup>。続いて、クワイヤに本文を記入する。

インクと絵具に関しても記録が残っている<sup>46</sup>。羊皮紙と同じく、入手には時間と職人の技術が必要だった。本文の記述には黒インク、一部の強調箇所には赤インクが使われた。黒いインクは、茨を原料とするものや、羊皮紙を腐食する没食子インクが使用された。豪華な写本では、金箔・銀箔や、様々な原料を用いた色インクを用いた<sup>47</sup>。筆記用具としてはガチョウの羽ペンが利用された<sup>48</sup>。

記述の形式に関しても以下のことが分かっている。知識を継承するためには読みやすい標準文字や書体が必要だった<sup>49</sup>。12世紀には読みやすくスペースを節約できるカロリング小文字体を用いられた<sup>50</sup>。句読点は朗読しやすくするために用いられ、散文テキストではピリオドや横線によって息継ぎの箇所が指示された<sup>51</sup>。文頭には大文字やルブリク（赤字見出し）が用いられた<sup>52</sup>。写本の素材は貴重だったため、多少の欠陥があってもそのまま使用されることが多かった。例えば加工の際に穴が開いた獣皮紙も破棄せずに、糸で修復したり穴を囲むように文字を書いたりした例がある<sup>53</sup>。さらに、文章の記入後は修正作業が行われた。誤記した文言に線を引いて修正したり、羊皮紙の表面を削って別の文言を上書きしたり、書き飛ばした文章を欄外に追加して挿入符を書いたりすることがあった<sup>54</sup>。

書記が本文を書いた後は、あらかじめ開けられていた場所に装飾文字師が人物やイニシャルを描く。さらに書記の指示に従い、章が変わる場所に赤や青のインクで大文字を入れ

---

<sup>45</sup> ハメル, 前掲書, pp.52-54

<sup>46</sup> ウェルズリー, 前掲書, pp.20-21

<sup>47</sup> ハイデ, 前掲書, pp.24-26. ハメル, 前掲書, pp.83-91

<sup>48</sup> ハイデ, 同上書, p.28

<sup>49</sup> ハイデ, 同上書, pp.36-37

<sup>50</sup> ハイデ, 同上書, pp.38-39

<sup>51</sup> ハイデ, 同上書, p.41

<sup>52</sup> ハイデ, 同上書, p.41

<sup>53</sup> ハイデ, 同上書, p.18. ハメル, 前掲書, pp.31-36, p.41

<sup>54</sup> ハイデ, 同上書, p.44. ハメル, 同上書, pp.123-115



る<sup>55</sup>。豪華な写本であれば挿絵が加わる<sup>56</sup>。挿絵画家は写字生の支持に従って尖筆で素描をし、インクで輪郭線を描いてから、色付けを行ったと考えられる<sup>57</sup>。なお、作業が終わらずに挿絵のスペースが空欄になったままの写本も発見されている<sup>58</sup>。

クワイヤの完成後は、それらを冊子の形にまとめた。各クワイヤを重ね、縦半分に折り、中央の折り目を縫い合わせた。その後、背綴じ紐を補強し表紙をつけた。表紙は板に革をかぶせる構造が多かった<sup>59</sup>。

このような写本が製作された場所は様々だった。まず、写本を教育・説教・聖書研究に用いる修道院の写字室が挙げられる。しかし12世紀以降は、宮廷尚書局、諸侯や都市の尚書局が公文書や法律文書の写本を作成するようになった。13世紀には世俗文学の受容が高まり、書記工房が商売として成立した<sup>60</sup>。また、写本の保管場所は用途によって異なっていた。中世後期に今日的な図書館が誕生するまでは、聖書は教会、典礼書は聖堂に保管されていた<sup>61</sup>。ベケット伝の多くは修道院や教会で典礼に使用されたため、おそらく、修道院社寺室で製作されて聖堂で保管・展示されていたのではないか。

12世紀のベケット伝は全て英訳版が出版されている<sup>62</sup>。しかし、上記のように中世写本は個体差が大きいため、研究のため原本の確認が必要となる可能性はある。その時にスム

---

<sup>55</sup> ハイデ, 同上書, p.46

<sup>56</sup> ハイデ, 同上書, p.46

<sup>57</sup> ハイデ, 同上書, pp.46-48. ハメル, 前掲書, pp.131-133. ウェルズリー, 前掲書, pp.21-22

<sup>58</sup> ハイデ, 同上書, pp.32-36. ハメル, 同上書, pp.123-126

<sup>59</sup> ハイデ, 同上書, p.77. ウェルズリー, 前掲書, pp.22-23

<sup>60</sup> ハイデ, 同上書, p.49

<sup>61</sup> ハイデ, 同上書, pp.83-84

<sup>62</sup> 現在最も利用されている一次史料は、'Materials for the History of Thomas Becket', ed. Robertson, James, Craigie, and Sheppard, Joseph, Brigstocke, 7vols, *Rolls Series* 67, 1875-85. (Staunton, Michael, Thomas Becket and his Biographers, Boydell press, 2006, p.17. また、Duggan, Anne. Josephine, Thomas Becket: A Textual History of His Letters, Clarendon press, 1980, pp.17-21. ). ソールズベリのジョンによるベケット伝としては、より新しい英訳版として、John of Salisbury, 'The Life of Thomas Becket', in Anselm & Becket: Two Canterbury Saint's Lives by John of Salisbury', trans. Pepin, Ronald, E, Pontifical Inst of Medieval studies, 2009.がある。

ーズに対応できるよう、ロンドンの Lambeth Palace Library と大英図書館で 12 世紀のベケット伝の写本を閲覧し、写本の扱い方について学んだ。

## 1. Lambeth Palace Library

Lambeth Palace Library は英国国教会が運営する、カンタベリ大司教の歴史的図書館であり、国立公文書館である。1610 年にリチャード・バンクロフト大司教によって設立され、主に大司教らによる書籍や写本の寄贈によってコレクションが拡充されていった。1953 年以降は英国国教会の歴史のための図書館としての役割が強化されている<sup>63</sup>。現在は英国国教会に関する史料を収集・保管・一般公開することを目的に運営されている<sup>64</sup>。

カタログの一部はウェブサイトで公開されており、非公開のものでも問い合わせによっては閲覧が可能になる。史料の閲覧のためには 2 営業日前までに公式フォームかメールで連絡し、史料を請求する必要がある。12 世紀のベケット伝は、メールのやりとりで確認した限りでは 6 点だった。今回はその中から、二次史料の出典を基に、MS135、MS136、MS138、MS157、MS1212 を閲覧した。

なお、今回は 12 世紀のベケット伝に限定したものの、ホームページで 1430 年頃に製作されたベケット写本の断片が提示されている。さらに、1185 年頃にベケットの側近であるボシャムのハーバート本人が執筆した可能性がある貴重な写本、MS 5048 も紹介され、デジタル版が閲覧できるようになっている<sup>65</sup>。ベケット伝の収集に関しては、The British Library ほど膨大ではないが、力を入れていると考えられる。

訪問時には予約の確認後、閲覧に不要なものは無料のロッカーに預けてから閲覧室へ入る。入退室の際は軽い持ち物の確認がある。スマートフォンの持ち込みや写真撮影は、使

---

<sup>63</sup> Lambeth Palace Library, 2025, *History of the Library*, Bibliotheca Lambethana, <https://www.lambethpalacelibrary.info/about-lambeth-palace-library/history-of-the-library/> (2025 年 2 月 12 日最終閲覧)

<sup>64</sup> Lambeth Palace Library, 2020, *Vision & Mission*, Bibliotheca Lambethana, <https://www.lambethpalacelibrary.info/about-lambeth-palace-library/vision-mission/> (2025 年 2 月 12 日最終閲覧)

<sup>65</sup> Lambeth Palace Library, 2025, *Archbishops of Canterbury*, “Two Manuscript Fragments Relating to Thomas Becket”, Bibliotheca Lambethana, <https://www.exhibit.so/exhibits/bp3opyjqXeAu8mh3MRNd?screen=OoZ64a9Z4v3FzYNbnCp2> (2025 年 2 月 12 日最終閲覧)

用目的を説明して許可が出れば可能となっている。写本を破損する恐れがあるためペンは持ち込めないが、鉛筆を借りることができる。

史料を閲覧する際はクッションの上に寝かせ、頁を固定するときは紐状の重石を載せる。写本が傷まないようにするためだ。館によっては手袋を使用することもあるようだが、本館は乾いた清潔な状態の素手で写本を扱っている。

## 2. 大英図書館

大英図書館は国立図書館であり、1億7000万点以上の資料を所蔵している。印刷された書籍だけでなく、新聞、録音、特許、版画、図面、地図、そして写本を有し、公開している。資料の管理、研究、事業の援助、文化活動の促進、学習の応援、国際的な協力を目的に運営されている<sup>66</sup>。

写本を含めた資料の閲覧には現地でのメンバーシップ登録が必要となる。2024年10月時点ではサイバー攻撃の影響で写本のカタログは公開されていなかったため、現地で紙のカタログを基に閲覧を申し込んだ。なお、特に貴重な写本（一部のベケット伝を含む）はウェブサイト上で閲覧できるが、実物にふれるためには推薦状が必要となる。今回は推薦状なしで、Arundel MS 15、Cotton MS Nero A.V、Harleian MS 2、Lansdowne MS 398を閲覧した。なお、ベケット伝は Lambeth Palace Library よりも大量に所蔵されていた。

---

<sup>66</sup> The British library, 2025, *About us*, The British library, <https://www.bl.uk/about-us> (2025年2月12日最終閲覧)



上段左：Arundel  
MS 15, f1.r

上段右：Cotton  
MS Nero A.V, f1.r

下段左：Harleian  
MS 2, f1, f1.r

下段右：  
Lansdowne MS  
398, f1.r

いずれも大英図  
書館

持ち込める物や写本の扱い方はランベス教会図書館と同様だが、写真撮影は自由となっている。なお、本来は写真をウェブ掲載は禁止されているが、今回はサイバー攻撃中のため特別措置として許可をいただいた。篤く感謝したい。

### 3. 写本の閲覧を通して

これまで二次資料の情報や一頁ごとに分割された状態の展示でしか見られなかった写本を、原型に近い形で閲覧することができた。さらに、現地の研究者の方たちが同じ閲覧室で写本を読み解き、手書きのメモやPCの図表にまとめている様子も見学した。これにより、写本を読み解く際の具体的な工程をイメージすることができた。学生と思われる方が写本を読んでいる様子を思い出すことが今後の研究の励みになっている。

また、羊皮紙という媒体に直にふれることで、これまで以上に具体的にベケット伝の制作や受容の過程が想像できた。特に以下の写真のような事例は、テキストを読むだけでは見つけられないものであり、中世を生きた人々の息遣いを実感できた。



上段左：Harleian MS 2、破れた羊皮紙を繕った跡。

上段右：Lansdowne MS 398、写本の欠落。左右のフォリオでは筆跡も変わっている。

下段：Cotton MS Nero A.V、描きかけの挿絵

他の写本も途中で筆跡が変化したり、書簡の引用が用いられていたり、様々な例を見ることができた。

加えて、自分の課題も再認識できた。私は、辞書がないとラテン語の読解ができず、原典を活用するだけの語学力が身につけていない。よって、せっかく写本を見る機会に恵まれたのに、内容に関しては全く読み解けなかった。特に書体に関しては、読みやすいカロリング小文字体であったにもかかわらず、アルファベットを見分けられなかった。しかし、Lambeth Palace Library や大英図書館では、私と同年代と思われる人々も PC でメモをとりながら写本を熟読していた。さらに、帰国後に西洋中世史ゼミで閲覧した写本の写真を紹介したところ、同席していた先生方は辞書なしで軽々と読み解かれていた。私も現存する中世写本を有効に活用できるよう、読解演習に力を入れたい。

おわりに

今回の調査では、ベケットのイメージおよび中世写本という史料について学びを深めることができた。最後に、上手くテーマと絡めることはできなかったが、貴重な発見・体験ができたことを報告したい。

一つには、英国独自の歴史観の発見がある。訪問した各施設では、必ず英国国教会の成立が歴史の転換点として扱われていた。教会だけでなく、V&A博物館と大英博物館、そ

して大英図書館の常設展と特別展 *The Medieval Woman* においても、必ず宗教改革により破壊された教会の物品や書籍が展示されていた。ロンドンで訪問した大型書店 Waterstone や Hatchers でも、歴史書のコーナーは『中世』と『テューダー朝』が分けられていた。歴史上の大きな出来事であることは認識していたが、英国においては時代区分に関わるほど重要な契機だと分かった。

また、直接調査に生かすことはできなかったが、大英図書館の特別展 *The Medieval Woman* を観覧することができたのも貴重な経験となった。中世を生きた女性たちの史料の展示であり、ベケット本人はおろかカンタベリ巡礼すら登場しなかったためイメージ調査には利用できなかったが、多くの中世史史料を見ることができた。特に信仰生活をテーマとしたコーナーでは、ずっと注目していた女性聖人に関する遺物や一次史料を目にすることができた。

また、大英図書館では卒業論文を執筆するための史料も見つけることができた。今後、西欧中世の聖人史を研究する上で、様々な面で糧となる経験をすることができた。協力してくださった各施設、本奨学金を提供してくださった中央大学文学部、調査についての相談に応じてくださった杉崎先生をはじめとする先生方、お世話になった全ての方に厚く御礼を申し上げる。

## 参考文献

Staunton, Michael, *Thomas Becket and his Biographers*, Boydell press, 2006.

ハイデ, クラウディア・ブリンカー・フォン・デア, 『写本の文化誌 ヨーロッパ中世の文学とメディア』 一條麻美子訳, 白水社, 2017 年

ハメル, クリストファー・デ, 『中世の写本ができるまで』 加藤磨珠枝監修, 立石光子訳, 白水社, 2021 年

ウェルズリー, メアリー, 『中世の写本の隠れた作り手たち ヘンリー8世から女世捨て人まで』 田野崎アンドレア監修, 和爾桃子訳, 白水社, 2023 年